

ブルシャスキー語の名詞修飾表現

吉岡 乾 (国立民族学博物館/NINJAL 共同研究員)

1. ブルシャスキー語について

系統的孤立語であるブルシャスキー語は、パキスタンのギルギット・バルティスタン州フンザ谷下流域、ナゲル谷、ヤスィン谷と、インドのジャンムー・カシミール州スリナガル市ボタ・ラージ居住区で、10万人ほどのブルショ人、その他の人々によって話されている、膠着的性質の強い、SV/AOV型の、(分裂)能格言語である。地理的に見れば南アジアの北端、周囲は西アジア東端、中央アジア南端、シナ・チベット西端の折衝地点といったところ。形容詞は名詞的で、副詞と言う語クラスを立てる文法的理由のない言語である。

本発表での例文¹は全て、発表者の現地調査によるものである。

2. 名詞類 (名詞・代名詞) による名詞修飾

名詞類で名詞を修飾する場合には、基本的には属格標識が修飾語に付される。属格標識は、ヒト女性 (HF) クラス名詞類がホストの場合には *-mo*、それ以外のクラスの場合には *-e* である：(1)。

(1) a.	<i>béege</i>	<i>ha</i>	b.	<i>ínmo</i>	<i>mobaíl</i>
	<i>béeg-e</i>	<i>ha</i>		<i>ín-mo</i>	<i>mobaíl</i>
	PN-GEN	家		彼/女.DIST-GEN.HF	携帯電話
	「ベークの家」			「彼女の携帯電話」	

譲渡不能所有の場合には、被所有物が必ず人称接頭辞を必要とする。人称接頭辞は人称・数・クラスで一致し、譲渡不能所有の所有主、感情形容詞の感情主、動詞の受動者 (undergoer) を標示する。更に人称接頭辞には、母音の広さ・長さによる3タイプ²の区別があるが、名詞に付く場合には語彙的に決まっています、タイプの異なりが何等かの機能を果たしているとは言い難いので、本発表では存在のみを述べておく。ブルシャスキー語の譲渡不能名詞は、大きく言って、身体部位、親族名称：(2a)、感情名詞、相対位置名詞：(2b)、といったグループに分けられる。

¹ 音素は5母音×長短×口鼻と36子音：/i, e, a, o, u; p, ph[p^h], b, t, th, d, t[t], th, d[d~ɽ], k, kh, g[g], q, qh, c[ts], ch, z[dz], č[ts̺], čh, j[dz̺], c[tʃ], ch, j[dz̺], s, š[ɕ], s[s̺], ɣ[y], h, m, n, ŋ, l, r[r], w, y[j], y[ɥ]/。弁別的ピッチアクセントがある (複音節語では「'」で表記、音声表記の単音節語では省略)。

² グロスに I/II/III とあるのが、その、人称接頭辞のタイプ番号である。

- (2) a. *béege éço* b. *ínmo* *múlji*
béeg-e i-ço *ín-mo* *mu-ljí*
 PN-GEN 3SG.HM:II-同性兄弟 彼/女.DIST-GEN.HF 3SG.HF:I-後ろ
 「ベークの兄弟」 「彼女の後ろ」

時折、属格を伴わない名詞の並置によって、修飾している事例もある：(3)。この場合、前の名詞が形容詞的に用いられているのだと判断できる。頻繁にあるわけではないが、例を探せば次々に見付かる程度にはある。

- (3) a. *gírí haldén* b. *mamú báalt*
gírí haldén *mamú báalt*
 アイベクス 1歳以上の牡ヤギ 乳 林檎
 「牡アイベクス」 「林檎の一品種」

明らかに修飾関係にない (dvandva 的な) 名詞の並置もあり、その場合にも格接辞が後部要素にしか付かなかつたりもするので、そもそもブルシャスキー語では、複合語が必ずしも音韻的に一語にならない、と考えるべきかも知れない³。

- (4) a. *har buácum* b. *guúy gúmimo*
har buá-c-m *gu-uy gu-mí-mo*
 去勢牛 牝牛-ADE-ABL 2SG:I-父 2SG:I-母-GEN.HF
 「畜牛から」 「君の両親の」

3. 形容詞類 (形容詞・数詞) による名詞修飾

形容詞類は属格を取らずに名詞を修飾する語クラスである。修飾語は被修飾語に前置される。

- (5) a. *tháanum ha* b. *šúa mobaíl* c. *matúm biránc*
tháan-m ha *šúa mobaíl* *mat-m biránc*
 高い-ADJVLZ 家 良い 携帯電話 黒い-ADJVLZ 桑
 「高い家」 「良い携帯電話」 「黒い桑」

指示対象が複数の場合は、形容詞によっては複数接尾辞を取る。名詞クラスに合わせて別々の複数接尾辞を持っている形容詞もある。

³ 但しその場合、非属格名詞+名詞の並置は全て複合なのか、基準は何か、という記述上の別の面倒臭さが生じる。

(6) a.	<i>tháaiko</i>	<i>hakíčaŋ</i>	b.	<i>šúa</i>	<i>mobaílišo</i>	c.	<i>matúmišo</i>	<i>biráŋç</i>
	tháan-ko	ha-kíčaŋ		šúa	mobaíl-išo		mat-m-išo	biráŋç
	高い-PL	家-PL		良い	携帯電話-PL		黒い-ADJVLZ-PL.X	桑
	「高い家:PL」			「良い携帯電話:PL」			「黒い桑 (の実) :PL」	

指示形容詞、数詞は、一般形容詞に先行することが多い。但し、厳密に決まっているわけではない。

(7) a.	<i>gucé</i>	<i>uskó</i>	<i>jótišo</i>	<i>urkái</i>	b.	<i>isé</i>	<i>han</i>	<i>šúa</i>	<i>mobaíl</i>
	gucé	uskó	jót-išo	urk-ái		isé	hán	šúa	mobaíl
	これらの.X	三.X	小さい-PL.X	狼-PL		その.X	一.XY	良い	携帯電話
	「これら三匹の小さな狼たち」					「その一つの良い携帯電話」			

4. 動詞類による2つの名詞修飾表現

4.1. 名詞修飾構造の類型論

本発表で言う名詞修飾構造とは、動詞類(動詞、コピュラ)の句が名詞類(名詞、代名詞)を修飾する構造ことであり、主要部名詞類をも含んだ全体を指すこととする。

通言語的に見た名詞修飾構造は、Comrie (1981)などにまとめられており、それによれば以下の4つのパターンがある。

- | | |
|--------------------------------|-------------------------------|
| (A) Gap strategy | (B) Relative-pronoun strategy |
| (C) Pronoun-retention strategy | (D) Non-reduction strategy |

簡潔に述べると、底となる名詞が修飾部となる動詞句内で元々居た位置を、どう処理するかによって区別される：(A)は空所にする方法、(B)は名詞の代わりに関係代名詞を立てる方法、(C)は普通の代名詞を立てる方法であり、(D)はその名詞がそのまま(或いは加工されて)残る方法である。

4.2. 構造的な異なり

ブルシャスキー語における、動詞類による名詞修飾表現は、大きく2つに分けられる。1つは、動詞類を非定形(完了分詞や不定詞)にし、被修飾名詞類に前置して、Comrie (1981)分類で言う、gap strategyで修飾する、「非定形-名詞修飾」。もう1つは、疑問詞を関係詞として用い、汎用接続詞を挟んだり挟まなかったりしつつ被修飾名詞類に前置して relative-pronoun strategy (或いは、non-reduction strategy)で修飾する、「関係-名詞修飾」である。

それぞれの名詞修飾構造の作りかたを、以下の例文(8)をベースにして、簡潔に説明する。

(8)	<i>sabuúr</i>	<i>jáa</i>	<i>áie</i>	<i>qhat</i>	<i>girmínumo</i>
	sabuúr	jáa	a-i-e	qhát	girmín-m-o
	昨日	私:GEN	1SG:II-娘-ERG	手紙	書く-NPRS-3SG.HF
	「昨日、私の娘が手紙を書いた」				

非定形-名詞修飾は、完了分詞を用いるものと、不定詞を用いるものがあり、構造的には同じだが、アスペクトの側面で区別がされている：(9)。即ち、前者が完了アスペクト、後者が未完了アスペクトの名詞修飾に用いられるものである。

(9) a. *sabuúr jáa áie* \emptyset *girmínúm* (*ité*) *qhat*
 [sabuúr jáa a:i-e girmín]-m ité qhát
 昨日 私:GEN 1SG:II-娘-ERG 書く-ADJVLZ その.Y 手紙
 「[昨日、私の娘が書いた]手紙」

b. *jáa áie* \emptyset *girmínas* (*ité*) *qhat*
 [jáa a:i-e girmín]-as ité qhát
 私:GEN 1SG:II-娘-ERG 書く-INF その.Y 手紙
 「[私の娘が書く／書いている]手紙」

非定形-名詞修飾は *gap strategy* であるため、(9)の例文は a.も b.も、被修飾語 *qhat* 「手紙」が元の文で占めていた位置は、空所 (\emptyset) になっている。名詞修飾節と被修飾語との間の指示形容詞（ここでは「手紙」が抽象物 (Y) クラス名詞なので、*ité*) は、省略可能であるが、挿入されることのほうが多い。

猶、ブルシャスキー語でもガノ交替は起こせる：(9)′。勿論、意味的な異なりも伴わない。但し、ヒト女性を除いて、能格と属格のどちらにも *-e* という標識を用いるため、実際に交替しているかどうかを判別できる状況は少ない。

(9)′ a. *sabuúr jáa áimo* \emptyset *girmínúm* (*ité*) *qhat*
 [sabuúr jáa a:i-mo girmín]-m ité qhát
 昨日 私:GEN 1SG:II-娘-GEN.HF 書く-ADJVLZ その.Y 手紙
 「[昨日、私の娘の書いた]手紙」

b. *jáa áimo* \emptyset *girmínas* (*ité*) *qhat*
 [jáa a:i-mo girmín]-as ité qhát
 私:GEN 1SG:II-娘-GEN.HF 書く-INF その.Y 手紙
 「[私の娘の書く／書いている]手紙」

一方で、関係-名詞修飾のほうは、*relative-pronoun strategy* を用いている：(10)。関係節内では勿論、動詞類は定形のままである。法の変化などもない。

- (10) *sabuúr jáa áie bésan girmínumo (ke)*
 [sabuúr jáa a:i-e bés-an girmín-m-o ke]
 昨日 私:GEN 1SG:II-娘-ERG 何-INDF.SG 書く-NPRS-3SG.HF CONJN
 (ité) *qhat*
 ité qhát
 その.Y 手紙
 「[昨日、私の娘が書いた]手紙」(lit.「昨日、私の娘が何を書いたその手紙」)

ここでは、被修飾語 *qhat*「手紙」が元の文で占めていた位置に、*bésan*「何を」という関係詞が用いられている。ヒンディー・ウルドゥー語、マラーティー語、スィンディー語で共通の *jō* のような関係詞専用の語彙は、ブルシャスキー語にはない。汎用接続詞の *ke*、指示形容詞の *ité*「その」は、どちらも省略可能であるが、やはり省略されないことが多い。

ちなみに、ブルシャスキー語の名詞修飾表現は、日本語に似て、代名詞を修飾することも可能である⁴:(11b)。形容詞が代名詞を修飾するのは、1、2 人称では聞き覚えがない。数詞の場合は、少数の場合には人称接頭辞を伴った数名詞、例えば *@-iskén*「三人、三者」⁵<数詞 *iskén, uskó, iski*「三つ.H/XY/Z」など、が用意されているので、人称代名詞を数詞で修飾することはなさそうである。

- (11) a. *sabuúr jáa qhat girmínam*
sabuúr jáa qhát girmín-a-m
 昨日 私:ERG 手紙 書く-1SG-NPRS
 「昨日、私が手紙を書いた」
- b. *sabuúr ∅ qhat girmínam je*
 [sabuúr qhát girmín-a]-m jé
 昨日 手紙 書く-1SG-ADJVLZ 私
 「[昨日、手紙を書いた]私」

完了相では、1 人称単数の主語人称接尾辞のみ、形容詞化（分詞化）接尾辞や非現在接尾辞の前に付加されるので、完了分詞も 1 人称単数でのみ主語で人称変化する。

4.3. 機能的な異なり

機能的な側面から言えば、非定形-名詞修飾構造と、関係-名詞修飾構造との間には、2 点の異なりがある。1 つめは accessibility hierarchy 上の使用可能域の異なりであり、2 つめは

⁴ Accessibility hierarchy 的に、余り右に行くときなくなるんじゃないかとも感じるが、発表者の肌感覚であり、今後の現地調査が必要であろう。

⁵ 「@-」は受動者人称接頭辞スロットを表す。

外の関係の名詞を修飾できるか否かである。

4.3.1. Accessibility hierarchy とブルシャスキー語の名詞修飾表現

項の身分によって、関係化できる範囲が異なり、それは階層的である。言い換えれば、ある名詞修飾構造で修飾できる底の名詞の、元の文での身分というものが、階層構造になっている。というのが、accessibility hierarchy の意味するところであるだろう。その階層は、(12)の通りである。

(12) Noun Phrase Accessibility Hierarchy (Keenan & Comrie 1977)

主語 > 直接目的語 > 間接目的語 > 斜格目的語 > 所有主 > 比較対象

この階層に合わせて調べた結果、ブルシャスキー語の 2 種の名詞修飾構造のカバーする範囲は、次の表 1 のようであった。

表 1: ブルシャスキー語の名詞修飾構造の使用可能範囲

NME\AH	主語	直接目的語	間接目的語	斜格目的語	所有主	比較対象
非定形-構造	○	○	○	○	○	×
関係-構造	○	○	○	○	○	○

非定形-名詞修飾構造は比較対象項を修飾できない一方で、関係-名詞修飾構造は全ての内の関係項を修飾可能である。以下、その可否の境界線を引く時の、「所有主」と「比較対象」とのそれぞれ例文を示す。(13a)は「元の文」、(13b)が非定形-名詞修飾、(13c)が関係-名詞修飾の例である。

- (13) a. *iné síse kamerá qharáap maními.*
iné sís-e kamerá qharáap man-m-i
 その.H 人-GEN カメラ 悪い なる-NPRS-3SG.Y
 「その人のカメラは壊れた。」
- b. *kamerá qharáap manúum iné sis*
 [kamerá qharáap man]-m iné sís
 カメラ 悪い なる-ADJVLZ その.H 人
- c. *ámine kamerá qharáap maními ke iné sis*
 [ámin-e kamerá qharáap man-m-i ke] iné sís
 どの.H-GEN カメラ 悪い なる-NPRS-3SG.Y CONJN その.H 人
 「[カメラが壊れた]その人」

(13b、c)のどちらもが、文法的であるとインフォーマントに判断されたので、ブルシャスキー語ではいずれの名詞修飾表現もが、所有者を底の名詞に取れるのであろう。

次に、下の例文を見て頂きたい。これらは「比較対象」項を修飾対象として外に出す実験の結果である。(14a)が「元の文」、(14b)が非定形-名詞修飾（非文判断されたもの）、(14c)が関係-名詞修飾の例となっている。

- (14) a. *isé húkcum buš yar gáaršíbí.*
isé huk-c-m buš i-yar gáarc-č+b-i-∅
 その.X 犬-ADE-ABL 猫 3SG.X:I-前 走る-IPFV+COP-3SG.X-PRS
 「その犬よりも猫が早く走っている。」
- b. * *buš yar gáarcas isé huk*
 [*buš i-yar gáarc]-as isé huk*
 猫 3SG.X:I-前 走る-INF その.X 犬
- c. *ámiscum buš yar gáaršíbí ke*
 [*ámis-c-m buš i-yar gáarc-č+b-i-∅ ke*]
 どの.X-ADE-ABL 猫 3SG.X:I-前 走る-IPFV+COP-3SG.X-PRS CONJN
isé huk
isé huk
 その.X 犬
 「[猫が速く走っている]その犬」

(14b)は非文法的、(14c)は文法的であるとの判断であった。

この違いは、恐らく、accessibility hierarchy で右に行けば行くほど、格などで明示されない際の推測時の負担が増えるからではないだろうか。詰まり、関係詞を残して、付随する格標識も保持する関係-名詞修飾表現と比べて、空白 (gap) にしてしまう非定形-名詞修飾表現では、底の名詞の元の立場が明示されない。その限界が、属格所有者と、奪格 (= 接格 + 離格) 比較対象との間に線引きをするのではないだろうか。

4.3.2. 内の関係と外の関係

前節の検証で、ブルシャスキー語における動詞類の名詞修飾構造と accessibility hierarchy との関連性は見えた。次に、いわゆる「外の関係」関連についても示す。非定形-名詞修飾構造は、一部の外の関係までカバーする：(15)・(16)。当然のことながら、関係-名詞修飾では表現できない。

- (15) *déciras gámiş* 「[料理する]賃金」
 [*d-i-s-rí*]-as *gámiş*
 TEL-3SG.Y:II-CAUS-熟れる-INF 賃金

(16)	<i>čhúmo</i>	<i>khar</i>	<i>étas</i>	<i>nas</i>	「[魚を焼く]匂い」
	[čhúmo	khár	i-t]-as	nas	
	魚	焼いた	3SG.X:II-する-INF	匂い	

これまで、外の関係の修飾表現は、この2例しか採っていない。「(内容が面白くて目が離せなくて)途中でトイレに行けないクリケットの試合」は、あまり考えた素振りもなく「言えない」とのインフォーマントからの返答であった。再トライが必要そうである。

5. まとめと今後の展開

ブルシャスキー語の2種類の動詞類による名詞修飾表現を対比してみると、非定形-名詞修飾は随分と日本語の動詞類による連体修飾に似て見え、一方で関係-名詞修飾はウルドゥー語などといった印欧語族インド語派の言語に似ている部分がある。個人的には前者が古来の表現方法なのではないか、後者は言語接触によって後から発展したのではないかなどと疑ってはいるが、その辺りはここにちょっとだけ書き記しておくだけに留めたい。寧ろ口頭でさらっと言うだけで明文化しないほうが良い気もするが、口頭発表では言い忘れてしまいそうなので、書いておく。

プロジェクトで作成された調査票がいよいよ配付されたので、今後はそれに沿って調査をしていく予定である。だが、特に外の関係に関しては、対象言語にどこまであるかの判らない話なので、良くない(実情と異なる)データ産出へと協力者を誘導してしまわぬよう、方法論をしっかりと練ってから実施する必要があるだろう。

<略号 (LGR の標準略号にないもの) >

ADE	接格	HF	ヒト女性クラス	X	具象物クラス
ADJVLZ	形容詞化	HM	ヒト男性クラス	Y	抽象物クラス
CONJN	接続詞	PN	固有名詞	Z	時空間クラス
H	ヒトクラス	TEL	完結 [telic]		

<参考文献>

- Comrie, Bernard. 1981. *Language Universality and Linguistic Typology: Syntax and Morphology*. Oxford: Basil Blackwell.
- Keenan, Edward L. and Bernard Comrie. 1977. Noun phrase accessibility and universal grammar. *Linguistic Inquiry*, 8: 63-99.